

九州の万葉集と風景画シリーズ（第五回）

みず

き

「水城」

JR鹿兒島本線「水城駅」の南と西鉄大牟田線「しもおおり下大利駅」と「とふるう都府楼駅」

間の車窓から東西に連なる鬱蒼たる木々に覆われた小さい丘が見えます。

この丘が「特別史蹟・水城跡」です。水城跡は福岡県太宰府市水城、国分、

吉松の地域に築かれた土塁遺構です。



（写生地） JR鹿兒島本線「水城駅」の南（水城西門跡推定地付近）から

東にそびえる大野山（現四王寺山）の麓へ延びる水城跡（土塁）

を描く。

（杏花）

④この水城跡は日本書紀・天智二年条に「・・・筑紫に大きな堤を築き、水を貯へしむ。名づけて水城と曰ふ。」と記されている「水城」で大宰府防衛のために築かれた長堤です。

当時、朝鮮半島では高句麗、百濟、新羅の3国が覇権争いを続けていたが唐（中国）と結んだ新羅が六六〇年、百濟を滅ぼした。百濟と友好関係にあった日本は百濟再興の遺臣らの要請を受け、援軍を差し向けるが、天智天皇二（六六三）年八月。朝鮮半島西南端の白村江（今の錦江）における海戦で唐と新羅の連合軍に迎え撃たれ、史上空前の大敗北を喫しました。

唐・新羅による日本への来攻を恐れた朝廷は、北部九州を中心として、天智天皇三（六六四）年に大宰府防衛施設の一つとして「水城」を築きました。

大宰府政庁（都府楼）は、福岡平野の南端に位置し、まわりを山に囲まれ、敵が攻めにくい地形をしています。大宰府政庁から北（博多側）へ約2キロ離れた地に築かれた「水城」は、博多湾（福岡）から南の筑後に広がる平野の最も狭い部分である大野山（現・四王寺山脈）の麓「国分丘陵（太宰府市）」から西側のJR鹿兒島本線「水城駅」の西にある「吉松丘陵（太宰府市）」の間に広がる平野部を博多湾（福岡）側からの敵の大宰府侵入を防ぐために塞ぐように築かれた土塁（土を盛り上げて築いた小さな

な砦) です。

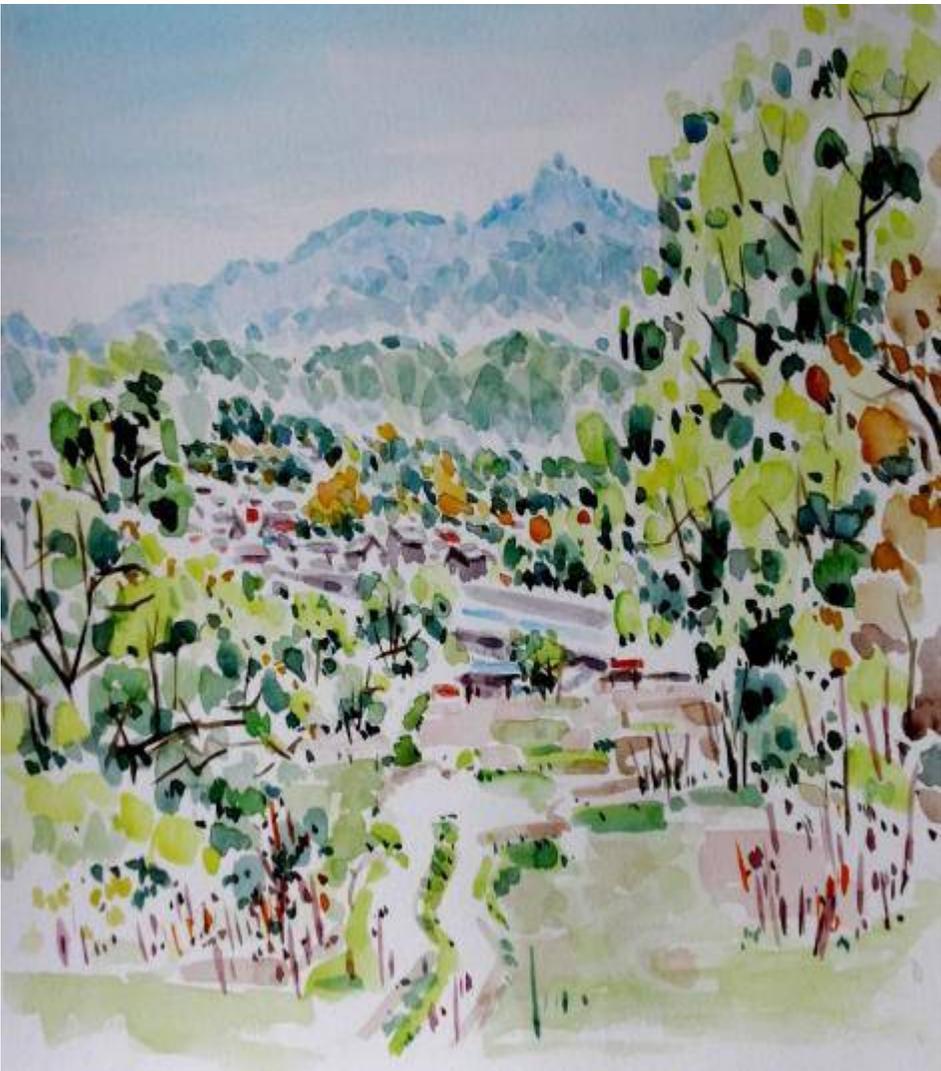
☐大宰府市史によると「水城はほかにあまり類例をみないが、現存する遺構は全長一・二キロメートル、基底部幅八〇メートル、高さ一三メートルの人口の盛土である近年の発掘調査により土塁の北側に幅六〇メートル、深さ四メートルの大規模な堀が確認され、日本書紀に記述されている「・・・水を貯えしむ。名づけて水城と曰ふ」という水城の実態が明らかになったとあります。

また。水城には博多側と大宰府側の往来のため東(国分丘陵麓)と西(吉松丘陵麓)にそれぞれ門があつたことが発掘調査の結果等で推定されています。この二つの門にはそれぞれに官道(現・国道)がついており「西門ルート」、「東門ルート」と称されています。

「西門ルート」は大宰府と古代におけるわが国の外交施設で当時博多湾を望める場所にあつた「鴻臚館」(現・福岡城跡内に遺構有)を直線的な官道で結ばれていた可能性が高いと考えられています。

「東門ルート」は福岡へ至る現在の「県道112号線」が古代の官道を踏襲していると見られ、このことから現在も機能していると推定されています。

水城跡は大正10年(1921)に国指定史跡(現特別史蹟)となり、「平成26年(2014)には「水城築造1350周年」を迎えます。



(写生地―2) 水城東門跡推定地背後の高台にある水城跡展望所から水城西門跡推定地に続く土塁(大宰府側)と吉松丘陵方面を描く。背景は背振

山山系 (杏花)

【水城と万葉集】

古代、水城は大宰府の防衛施設の用途と別に境界としても認識されていた

たことが天平二(七三〇)年十二月、大宰帥だざいのそち(大宰府長官) 大伴旅人が

大納言だいなごん(律令制で太政官の次官・右大臣に次ぐ高官)に任せられ、いよいよ

よ都に向けて出立の日、水城での送迎の儀式で「別れ易きを傷み、逢い難

きを嘆き」涙をぬぐい袖をふって詠われた」という惜別の歌二首が水城の境界としての性格がよく現れていると言われています。

○冬十二月、大宰帥大伴郷だざいのそちおおとものまへつきみの京に上る時に娘子のぼの作る歌二首をとめ

おほ

せ

かしこ

1) 凡ならば かもかも為むを 恐みと

いた

しの

振り痛き袖を 忍びてあるかも

卷六―九六五 作者 遊行女婦・児島うかれめ こしま

(解説) 普通のお方ならば、ああもこうもしましように恐れ多くて、いつもならば、はげしく振る袖をこらえて振らずにおります。

やまどぢ

くもかく

しか

2) 大和路は 雲隠りたる 然れども

ふ

そで

なめ

も

わが振る袖を 無礼しと思ふな

卷六―九六六 作者 遊行女婦・児島

(解説) 大和へ行く道は雲に隠れています。(ですから私の振る袖はお見えにならないでしょう。)しかし、こらえきれずに振る袖を、どうぞ無礼だと思いにしないでください。

*天平二年(七三〇)十二月、大伴旅人は大納言おおともたびと(帥兼任)となり、都(奈良・平城京)に向かって帰途についた。

☐左注ではその時の様子を述べている。

(注) 大宰帥大伴郷、大納言に兼任して、京に向ひて上道す。みちたち

この日、馬を水城に駐めて、とど府家ふけ(大宰府政庁)を顧み望む。時に郷を送る府史の中に、遊行女婦あり。うかれめ其の字を児島と曰ふ。あざな こじま いここに娘子、をとめ此の別るることの易きことを傷み、その会ふことの難きことを嘆き、涙を拭ひて、みづから袖を振る歌を吟ふ。のこ うた

*作者の「遊行女婦」は、もと神をまつる巫女であったが、のちに貴人の宴席などに侍り、はべ高位高官とも対等に歌を交わし合った女性でここでは、その名を「児島」と云った。(万葉集を知る事典参照)

☐これに和えて、こた旅人も二首の歌を詠じている。

大納言大伴郷の和ふる歌二首こた

やまどじ きび こしま
3)大和路の吉備の児島を 過ぎて行かば
つくし こしま

筑紫の児島 思ほえむかも

卷六―九六七 作者 大伴旅人

(解説) 大和に行く道の、吉備の国の児島(現岡山県児島半島)を通ったならば、きつと筑紫の同じ名の児島が思い出されるだろうな。

ますらぎ

みずくき

みずき

4) 大夫と 思へる我や 水茎の 水城の上に

なみだのこ

涙拭はむ

巻六―九六八 作者 大伴旅人

(解説) 涙なぞこぼさぬ立派な男子と思つている自分も、水城の上に立つ

て、涙をぬぐうであろうか。

【その他参考文献】 「特別史蹟水城跡」(財団法人 古都大宰府保存協会)

「太宰府市史」 考古資料編 (太宰府市、平成十五年) ・「万葉のふさと」 稲垣富夫著

「日本古典文学大系 万葉集二」 等